令和８年度(2026)第７回資料小展示　　2026. 10.1～10.29

医家の資料 ―今年度公開の資料から―

今回の資料小展示は、今年度、当館が新たに公開した以下２つの諸家文書から、特徴的な医家伝来資料を紹介します。

➢津田家文書（山口市）　130 件 130 点　※従来公開分の 32 点に追加
＊文化３～昭和 17 年（1806～1942）
＊津田浩は明治以降、吉敷郡山口町（現山口市）などで医業に従事しました。また、凍庵・丘松の雅号をもつ俳人としても知られました。

➢佐藤家文書（神奈川県）　205 件 240 点
＊近世後期～近現代
＊佐藤家６代に関する文書群。伊織・道哉・方朔・良策・寛治は厚狭郡小野村（現宇部市）や吉敷郡秋穂村（現山口市）などで医業に従事しました。正己は吉敷郡秋穂町助役を務めました。

①解剖学　骨靭帯筋肉編　一　　（津田家〈山口市〉54）
②解剖学　血管淋巴編　二　　（津田家〈山口市〉55）
明治31-32年ヵ（1898-1899ヵ）

津田浩は明治 35 年（1902）に京都府医学校（現在の京都府立医科大学）を卒業し、医師資格を取得しました。同年に山口町で医業を開始[注1]した他、明治 37 年には隣接する吉敷郡宮野村（現山口市）の村医に採用されたことにより、隔離病舎主任医を務めるなど、同村の感染症対策にも寄与しました。村内在住医ではありませんでしたが、従来開業医（西洋医学に基づく医術開業試験の受験を免除された近世以来開業の漢方医など）が中心だった明治期宮野村の地域医療において、津田に求められた役割は大きかったといえます[注2]。

従来公開分の津田家文書には、山口町や宮野村の患者に対する処方録（津田家 2～12）など、津田の医業の実態を伝える資料が含まれますが、新規公開分は、津田が京都府医学校在学時に作成した講義記録および医学書など、医学修業過程に関わる資料を豊富に含みます。つまり、医師資格取得前・取得後の津田の活動を併せて把握可能な一連の資料が揃ったことになります。

資料①・②は京都府医学校で津田が受講した講義の記録です。解剖学は第１年次の課程でした[注3]。資料①の２丁目表には「京都府医学校教諭医学士加門桂太郎口述/仝校生徒 津田香市筆記」、最終丁裏には「解剖

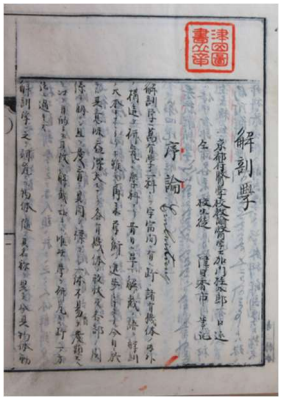
学教場筆記　京都府医学校一年生　津田丘松」と記されています。「香市」は津田の雅号のひとつと考えられ、これらは津田が１年生の時、同校教員の加門桂太郎（著名な解剖学者）から受けた解剖学講義の記録であることが分かります。

記録には精細な図も添えられ、頬骨の眼窩部分を描いた図の横には「内務試」と朱書きされています(資料①36丁裏）。京都府医学校は卒業生の医術開業試験が免除された甲種医学校でしたが、講義中に同試験の出題内容に関する言及があったのかもしれません。

また、「内科学」の講義記録（津田家 78）には、津田宛の書簡が挟み込まれています。年代は不明ですが、39度８分の高熱を伝えると共に村役場への届け出についても触れられている点、差出人は宮野村書記を務めた経歴をもつ人物である点から、法定伝染病が疑われる事案の情報を村医の津田と共有する目的で書かれた書簡である可能性も考えられます。このような書簡の存在からは、医師として地域医療に従事する日々の中でも、津田が医学生時代の講義記録を手元に置き参照していた様子が窺えます。



▲（右）資料①表紙・（左）資料②表紙

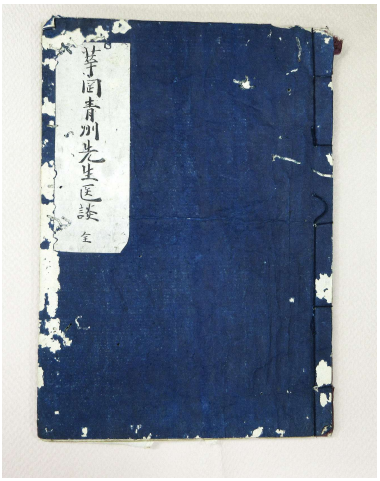


▲資料①２丁表

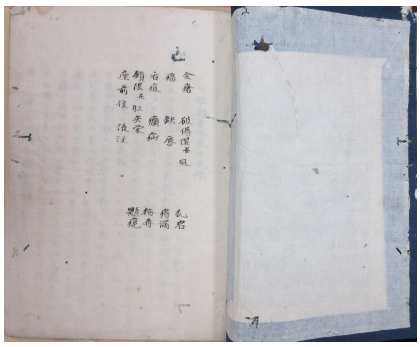
③「華岡青洲先生医談 全」　（佐藤家〈神奈川県〉21）　江戸時代後期

華岡青洲が文化元年（1804）に行った乳がんの腫瘍摘出術は、全身麻酔下手術の嚆矢として知られます。資料③は青洲の治療法を門人が記録した「青洲医談」の抄録[注4]とみられます。佐藤家文書には他にも、青洲の著述や処方集、手術記録の写しが含まれます。これは、佐藤道哉が天保年間に師事した伊藤俊貞（厚狭郡藤河内村〈現宇部市〉）や吉田寿庵（改め森道保、宗像郡津屋崎村〈現福岡県福津市〉）が、青洲の門人[注5]であったためと考えられます。

道哉は弘化３年（1846）、氷上山興隆寺真光院に召し抱えられました[注6]。なお、同じく真光院の医師であった伊藤生民は、青木周弼や栗崎道意に蘭学を学んだ他、『小鯖村史』によれば、慶応 3 年（1867）には女性受刑者の解剖を実施したとも伝えられます[注7]。道哉関係の資料により、萩藩内の格式高い寺院がどのような学問的背景をもつ医師を寺医としていたのか、紐解く手がかりとなりそうです。



▲　資料③表紙



▲資料③１丁表

④「厚豊美三郡聯合第一回医学会記念写真」　（佐藤家〈神奈川県〉110）

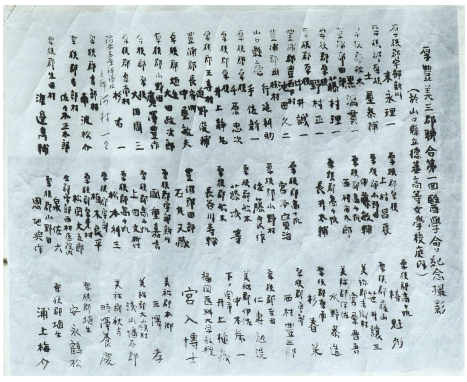
明治 37-44 年ヵ（1904-1911 ヵ）

資料④の集合写真に付された「厚豊美三郡聯合第一回医学会紀念撮影」と題する人名一覧により、写された人物が佐藤良策（中列右から 6 人目）の他、厚狭郡・豊浦郡・美祢郡・下関市や山口県病院の医師、そして、宮入慶之助（前列左から 6 人目）であることが分かります。また、宮入の「福岡医科大学教授」という肩書から、この写真は、宮入が同大学に衛生学教授として着任した明治 37 年から、同大学が九州帝国大学医科大学に改称される明治 44 年までの間に撮影されたものと考えられます。

衛生学・寄生虫学者であり、日本住血吸虫の中間宿主であるミヤイリガイの発見者としても著名な宮入は、中列左端に写る恩地与策（厚狭郡須恵村〈現山陽小野田市〉の開業医）の寄生虫研究にも協力していました。この恩地は、大正期に山口県が実施した寄生虫症実態調査を主導するなど、地域の公衆衛生活動に尽力した人物であり、大正５年（1916）には私費で宮入を招聘して県内で講話会を開催しています[注 8]。資料④に宮入が写っているのは、恩地の依頼を受け、この「第一回医学会」で講演など行ったためとも考えらます。



▲資料④集合写真



▲資料④集合写真の人名と位置一覧

⑤「私立日本医学校第二回夏期講習会講習証書」　（佐藤家〈神奈川県〉156）

明治 38 年（1905）

佐藤寛治は明治 32 年に山口県師範学校を卒業し（佐藤家 158）、小学校教員として勤務した後、上京して私立日本医学校（現在の日本医科大学）で医学を学びました。明治 38 年に医術開業前期試験（佐藤家 168）、明治 42 年に後期試験に及第（佐藤家 166）して、医師資格を取得しています。

私立日本医学校は前身の済生学舎が廃止されたのをうけて明治 37 年に設立された医学教育機関です（校長は山口県出身の山根正次）。明治 45 年に日本医学専門学校に昇格したため、わずか 8 年間のみ存在した学校であることから、関係資料はあまり多く残っていません。同校は設立年に約 1 か月間の夏期講習会を開催したところ、「入会者多ク好成績」[注 9] を得たことにより、翌年以降も継続して開催しました。資料⑤は寛治が前期試験に及第して間もなく、この講習会を受講した修了証です。第一・第二と 2 つの学科が設けられ、寛治が受講したのは第二学科でした。講師陣には、同校教員の他、医術開業試験委員を務める学外の医学士が名を連ねています。



第七四號

講習證書

山口縣士族　佐藤寛治

右者本校第二回夏期講習會ニ於テ第二學科講習ノ業ヲ畢ルタルコトヲ證ス

外科手術學　講師　醫學士　住田正雄

屍體的實地演習

理學的診斷學　講師　醫學士　鳥山南壽次郎

繃帶學實習　講師　醫學士　寺田織尾

花柳病學　講師　醫學士　百瀬玄淑

醫化學實習法　講師　須藤憲三

本會各科講師ノ證明ヲ諦認シ此證書ヲ授與ス

明治三十八年九月一日

日本醫學校第二回夏期講習會

私立日本醫學校長正五位勲六等醫學士山根正次

【 注 】

注１　日本杏林社編『日本杏林要覧』（1909 年）

注２　真木奈美「明治期宮野村における急性感染症対策と隔離病舎の設立」（山口市編『山口市旧宮野村役場文書の研究―近代日本の変革期における地域社会―』、2022 年）

注３　京都府立医科大学創立八十周年記念事業委員会編『京都府立医科大学八十年史』（1955 年）

注４　松木明知 「華岡青洲の『青洲医談』に関する研究―諸写本の書誌、成立、内容、異名同書についての考察―」（『日本医史学雑誌』第 65 巻第 1 号、2019 年）

注５　呉秀三「華岡青洲先生春林門人録」（『華岡青洲先生及其外科』、1923 年）

注６　山﨑一郎「萩藩領の医師について―藩医・陪臣医・寺医・地下医―」（一の坂研究会 2016 年 4 月 8 日レジュメ ）

注７　坂倉道義『小鯖村史』（小鯖村史刊行会、1967 年）

注８　真木奈美「大正期山口県における保健衛生調査の展開」（『山口県文書館紀要』第 53 号、2026 年）

注９「日本医学校ノ夏期講習」（『産科婦人科学雑誌』7 (7)、1905 年 7 月）